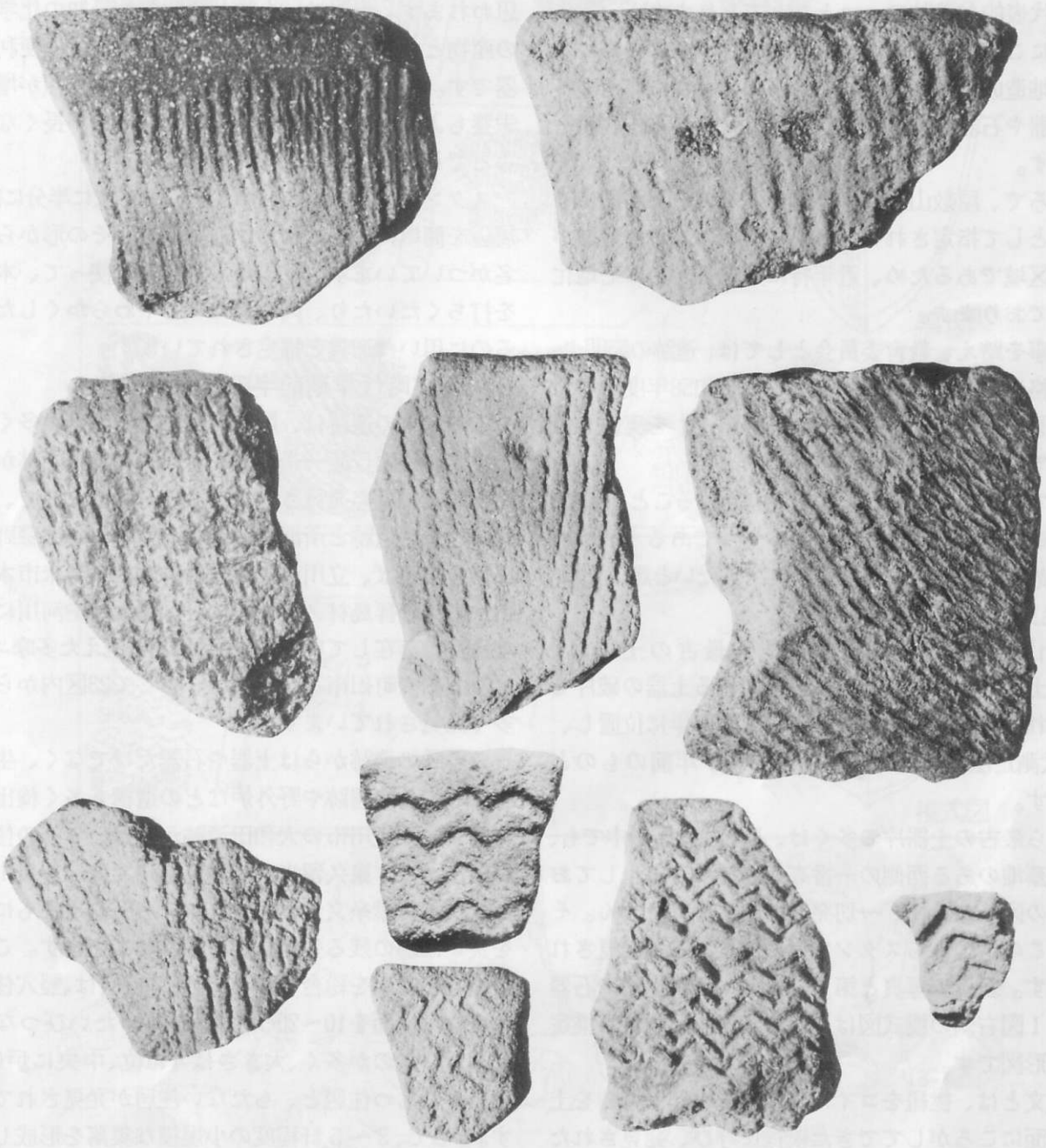
武蔵村山市立歴史民俗資料館報

資料館だより

第 6 号
昭和61年3月20日

編集・発行　武蔵村山市立歴史民俗資料館　　武蔵村山市中藤6343 TEL 0425(60)6620



武蔵村山市の最古の土器（破片）－原寸大－

武蔵村山市の最古の土器

―屋敷山遺跡確認調査の成果から―

1．屋敷山遺跡確認調査

武蔵村山市内に存在する遺跡は、現在32ケ所を数え、狭山丘陵南麓の台地や、残堀川・空堀川流域に分布する傾向を示しております。

これらの遺跡の中で、屋敷山遺跡は、狭山丘陵より延びる舌状台地の付け根に位置し、その規模も大きく、当市の代表的な遺跡の一つとなっております。

すでにこの地域には、お寺や学校等が建てられており、墓地造成工事や、校庭の削平等の工事に伴って多量の土器や石器が発見されている事も、その事を物語っています。

ところで、屋敷山遺跡の周辺は、その一部が観音寺森緑地として指定されているものの、大部分の区域が市街化区域であるため、近年特に畑地を中心に宅地化が進んでおります。

この事を踏え、教育委員会としては、遺跡の範囲や、その性格をさらに明確にするため、昭和58年度から3ケ年計画をもって「屋敷山遺跡確認調査」を実施したところであります。

そこで、調査の詳細は、報告書に委ねることとして、本稿では、今回の確認調査成果の一つである〝武蔵村山市の最古の土器〟に焦点をあててみたいと思います。

2．発見された最古の土器

屋敷山遺跡から発見された当市最古の土器は、撚糸文土器（よりいともん）と山形押形文土器（やまがたおしがたもん）と呼ばれる土器の破片です。これらの土器片は、縄文時代早期前半に位置し、C^{14}年代測定法によると、今から約9千年前のものとなります。

これら最古の土器片の多くは、屋敷山遺跡の中でも、真福寺墓地のある西側の一番高い台地から出土しており、他の区域からは、一切発見されておりません。そして、この台地からスタンプ形石器も数多く発見されています。表紙の写真と第Ⅰ図がそれらの土器や石器で、第Ⅰ図右側の模式図は、それらの土器片から推定した完形図です。

撚糸文とは、撚紐（よりひも）をコイル状に巻きつけた丸棒を土器の表面にころがしてできた模様を呼び、発見された土器の中には、撚糸文のかわりに縄文（じょうもん）（撚紐をころがしてつけた模様）を施した土器もあります。

山形押形文とは、山形の溝を数本連続して堀込んだ丸棒を土器の表面にころがしてできた模様を呼び、山形押型文の他にも、楕円押型文や格子目押型文などがあります。

撚糸文土器や押型文土器に限らず縄文時代早期の土器は、大部分が底の尖った砲弾形の〝尖底（せんてい）土器〟と呼ばれる土器で、焚火の中央に地面に立てて使用したと思われます。土器は、人類が発明した最初の化学変化の産物とされ、食物の煮炊きや貯蔵・運搬に便利な容器です。特に煮ることによって、食物の種類が増え、栄養もよくなり、生のものよりも日持ちが長くなったことでしょう。

スタンプ形石器は、河原石をこぶし大に半分に割り、周辺を簡単に加工しただけの石器で、その形からこの名がついています。下端の平らな面を使って、木の実を打ちくだいたり、肉をたたいてやわらかくしたりするのに用いた道具と推定されています。

3．縄文時代早期前半の周辺の遺跡

この時期の遺跡は、屋敷山遺跡以外でも数多く見られます。狭山丘陵一帯では、資料館の東の山林から楕円押型文が1点発見されているのを始めとして、瑞穂町の六道山遺跡と所沢市に四ケ所見られ、武蔵野台地に目を移せば、立川市大和田遺跡や東久留米市本邑遺跡、昭島市拝島林ノ上遺跡など、湧水源や河川に接して点々と存在していますし、多摩川を越えた多摩ニュータウン内や町田市・八王子市、そして23区内からも数多く発見されています。

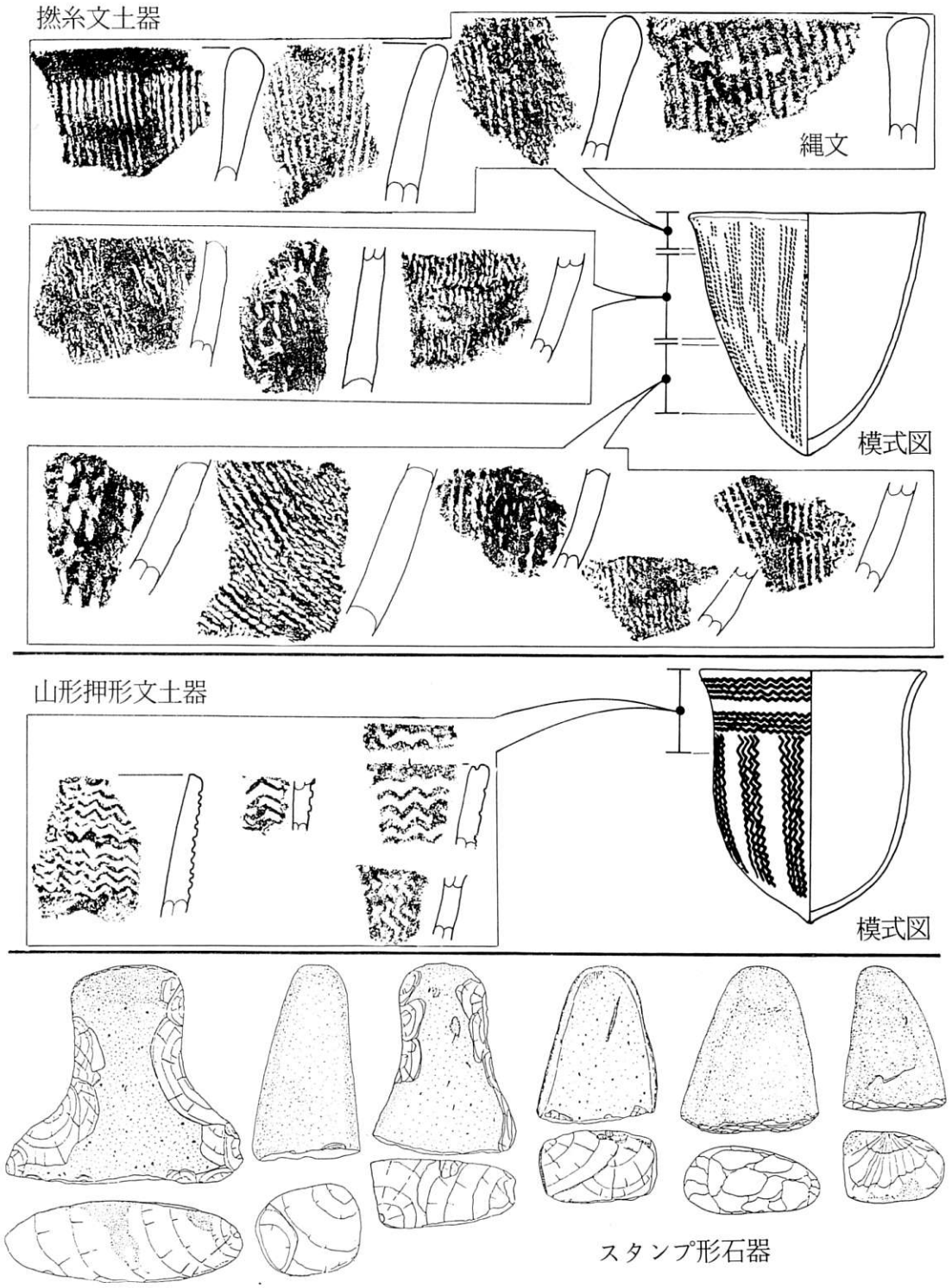
これらの遺跡からは土器や石器だけでなく、生活の場としての住居跡や野外炉などの遺構も多く検出されています。立川市の大和田遺跡からは、4軒の住居跡が検出され、東久留米市の本邑遺跡では、黒目川に面した低地に撚糸文土器とスタンプ形石器とともに、火を焚いた跡の残る生活跡が発見されています。これらの調査の成果を総合すると、当時の住居は、竪穴住居と呼ばれる地面を10～20cm程堀り窪めたいびつな四角形に近いものが多く、大きさは4m位、中央に炉（＝いろり）をもつ住居と、もたない住居が発見されています。そして、3～5軒程度の小規模な集落を形成していたとも推定されています。

残念ながら、屋敷山遺跡からは住居跡や野外炉は発見されておりませんが、先に触れた土器片の出土から

見ても、この当時の人々が生活を営んでいたことには違いありません。

4．おわりに

もう一度、表紙写真を見て下さい。これらの土器片は実物大です。小さな土器片ばかりです。土器と言えば、大部分の方々が縄文時代中期の装飾豊かな大形の土器を思い浮かべる事でしょう。実際、屋敷山遺跡の土器のほとんどがこの縄文時代中期の土器でした、しかし、ともすれば見落してしまいがちな小さな土器片にも、武蔵村山市の歴史を紐解く上で、欠くことのできない貴重な意味が含まれているのです。



第１図　武蔵村山市最古の土器

（撚糸文土器・山形押型文土器は$^{1}/_{2}$　スタンプ形石器は$^{1}/_{4}$）

武蔵村山市の庚申塔

現在、市内には21基の庚申塔が確認されています。このうち、すでに館報で15基の庚申塔を紹介しましたが、残る6基の庚申塔についてここで紹介します。

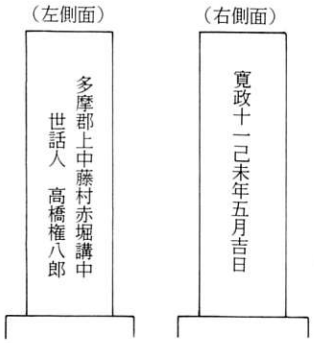
なお、分布図及び庚申塔については館報第2号を参照してください。

三本榎の庚申塔（写真1　分布図№15）

市指定文化財である三本榎のうち、最も西側にある乙幡榎の根本に文字庚申塔が建てられている。高さ90cm、幅36cm、厚さ21cmの角柱状のもので、正面に「庚申塔」と大きく彫り刻み、下部には三猿が配されている。右側面には「寛政十一己未年五月吉日」と刻み、左側面には「多摩郡上中藤村赤堀講中　世話人高橋権八郎」と刻まれている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には、この庚申塔についての記載はみられない。

写真1　三本榎の庚申塔



萩の尾・薬師堂の青面金剛塔（写真2　分布図№16）

萩の尾の薬師堂の境内には南北朝時代延文元年の宝篋印塔と共に庚申塔が建てられている。高さ89cm、幅43cm、厚さ22cmの平柱状のもので、正面上部に日月瑞雲が刻まれ、中央には青面金剛が浮き彫りにされている。青面金剛の左三手は鉾と矢と剣を握り、右三手は宝輪と弓とショケラ（半裸体の女人）の髪をつかんでいる。右側面には「天明三癸卯年正月吉日」と刻み、左側面には「武州多摩郡上中藤村」と刻まれている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第13番萩野尾村薬師堂前　天明三卯年正月萩尾赤堀村中」と記されている。

写真2　萩の尾・薬師堂の青面金剛塔

原山の青面金剛塔（写真3　分布図№17）

原山地域運動場北側の四辻に寛政五年の馬頭観音と並んで庚申塔が建てられている。高さ178cm、幅38cm、厚さ24cmの笠付の角住状のもので、風化が激しく判然としないが、正面に六手の青面金剛が彫り刻まれている。左二手は剣と矢を持ち、右二手は宝輪と弓を持っている。残り二手は胸の前で合掌している。右側面には「寛保元辛酉年」と刻み、左側面には「十一月吉日」と刻まれている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第12番同村伊勢森北塚の上　寛保元年十一月」と記されている。

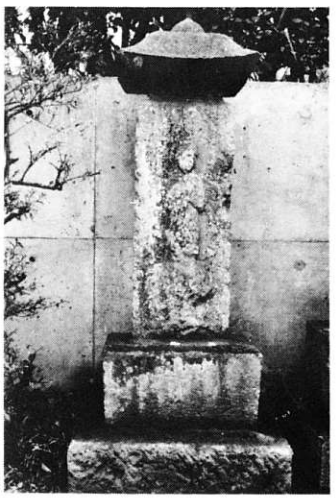
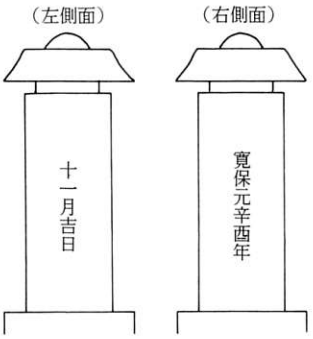


写真3　原山の青面金剛塔

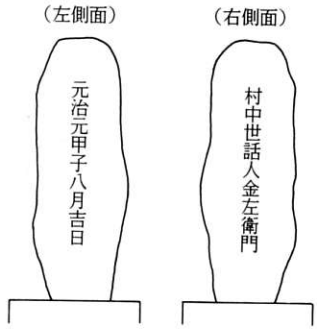


原山・中砂の庚申塔（写真４　分布図№18）

中央２丁目145番地３先に馬頭観音と庚申塔が並んで建てられている。庚申塔は高さ85cm、幅35cmの自然石のもので、正面に大きく「庚申」と彫り刻まれている。台石には判然としないが、線刻の三猿が配されている。右側面には「村中世話人　金左衛門」と刻み、左側面には「元治元甲子八月吉日」と彫り刻まれている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第11番同村原口に在り」と記されている。

写真４　原山・中砂の庚申塔



入りの青面金剛塔（写真５　分布図№19）

入りの天満宮東側の四辻の土手の上に馬頭観音と共に庚申塔が建てられている。高さ67cm、幅26cm、厚さ16cmの角柱状のもので、正面上部には日月瑞雲が刻まれ、中央には六手の青面金剛が浮き彫りされている。左二手は三叉鉾と矢を持ち、右二手は宝輪と弓を握り、残り二手は胸の前で合掌している。右側面には「文化四丁卯年十月日」と刻み、台石には三猿が彫られている。

杉本林志著「百庚申巡礼記」には「第９番中藤村十王堂西天神坂西角」と記されている。

写真５　入りの青面金剛塔

谷ツの青面金剛塔（写真６　分布図№20）

谷ツの稲荷神社の前に庚申塔が建てられている。高さ87cm、幅27cm、厚さ13cmの平柱状のもので、正面上部に日月瑞雲を配し、中央に六手の青面金剛が浮き彫りされている。青面金剛の持ち物は左二手が三叉鉾と矢であり、右二手が宝輪と弓である。残り二手は胸の前で合掌している。右側面には「嘉永元申因七月吉日」と年号だけが刻まれ、台石には三猿が浮き彫りされている。

この庚申塔は中央部で折損しているが、風化が少なく青面金剛の姿もはっきりしており、保存状態の良いものである。

写真６　谷ツの青面金剛塔

写真で見る 今と昔 ――写真展から

資料館では、昭和58年６月から市報や社会教育だよりの紙面を利用して、広く市民の所有する写真の提供をお願いしております。

この結果、現在まで絵はがきなどを含め311点に及ぶ貴重な写真資料の提供をいただきました。これらの写真の中から市内の学校に関する写真を整理して、昨年12月『武蔵村山市の今と昔「市内の学校の移り変わり」と題して写真展を実施しました。その中から昔の様子がよくうかがえる４枚の写真を紹介します。

－写真の解説－

写真１

昭和６年頃に撮影された、当時の大正尋常高等学校（現在の市立第一小学校）の校舎です。

写真２

昭和29年頃に撮影された、当時の村立村山小学校第一分校。

写真３

この写真は、昭和初期に撮影されたもので、大正尋常高等学校で行なわれた歓迎式の様子です。

写真４

この写真も昭和初期に撮影されたもので、当時の学芸会の様子です。

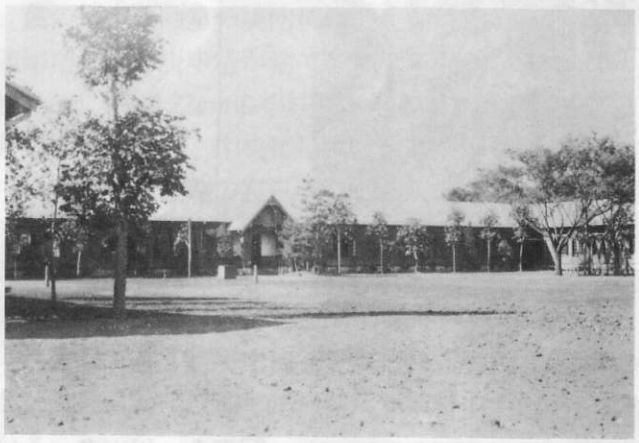


写真１　大正尋常高等小学校（現第１小学校）校舎

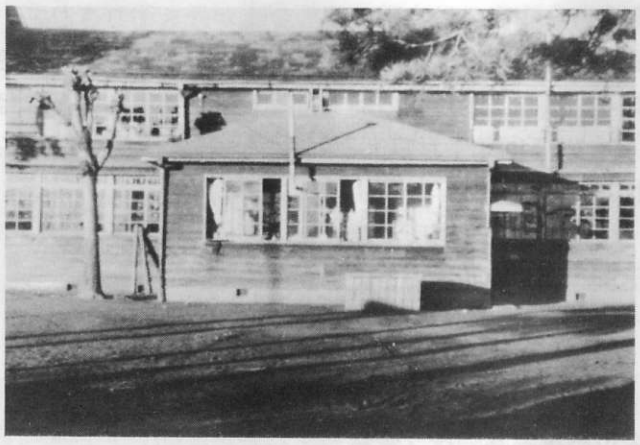


写真２　村立村山小学校（現第三小学校）校舎

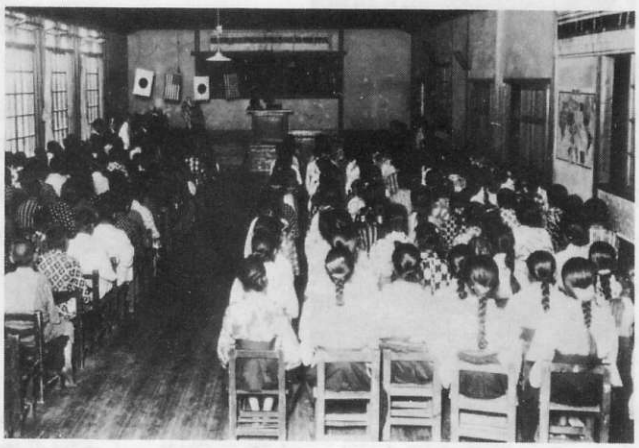


写真３　歓迎式の様子

写真４　学芸会の様子

文化財アラカルト③

民俗コーナー「収 納 具」

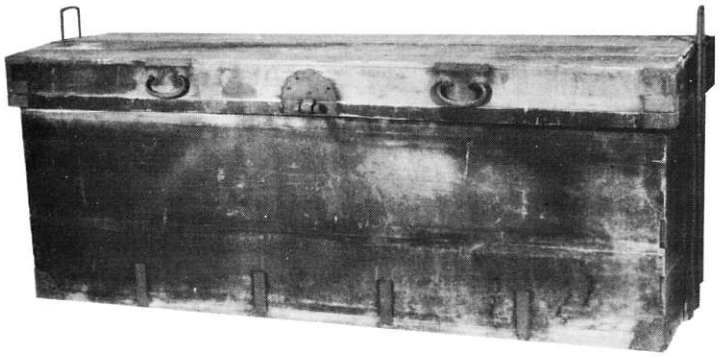
衣服、装身具などを収納する用具に、長持（ながもち）、葛籠（つづら）、箪笥（たんす）などがあります。資料館にも当時の村山で使用されていた、これらの貴重な収納具が保管されております。そこで、今回の文化財アラカルトでは、この写真を用いながら収納具の紹介をします。

長　持（ナガモチ）

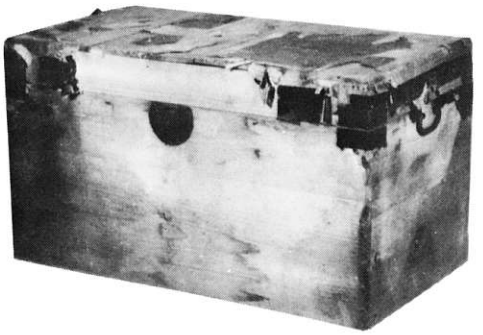
衣類や調度などの収納に用い、蓋（ふた）つきの長方形の箱で、棹（さお）をとおして二人でかついで運ぶ。長持は桐材を用い、普通、長さ5尺、幅・高さとも各々2尺、蓋は印籠蓋（いんろうふた）で、錠前（じょうまえ）・担金具（にないかなぐ）を付し、箱・蓋の四隅に金具をつけ、多く木地（きじ）のままで用いた。はじめ長持には衣類のほかに食物などを入れて運んだが、後世は衣類・夜具などを入れ、近年まで嫁入道具の一つに数えられていた。長持唄は、神事・婚礼などに、これをになって運んだ人夫が歌った唄で、今日にも伝えられている。

葛　籠（ツヅラ）

衣類などの収納に用いる、調度品の一種。形は長方形で、藤蔓（ふじづる）や竹・桧（ひのき）を編んで作った。さらに紙を貼り、渋（しぶ）・漆（うるし）などを塗るものもある。古く「ツヅラフジ」の蔓（つた）を用いていたので、葛籠・衣籠・葛羅などと書いて「ツヅラ」と読む。竹や桧を用いて編み、紙に渋・漆を塗るようになったのは近世のことで、葛籠は嫁入調度品の一つに数えられるようになった。江戸・京都などには葛籠師（つづらし）がいて製造していたが、今日ではほとんどみられなくなっている。



長　持



葛　籠

箪笥（タンス）

戸棚と引き出しとからなる収納具である。収納物によってその名称と形を異にするが、普通は衣装箪笥のことをさす。古くは櫃（ひつ）や厨子（ずし）が用いられ、近世にはいってから刀箪笥、旅箪笥など、小形の箪笥が作られた。ついで小袖箪笥（こそでたんす）ともよばれる引き出し形式の箪笥が作られ、長持とともに嫁入道具の一つとされた。材質は桐、硬木類が用いられる。桐箪笥はその湿気に対する性質から衣服の収納具に最適とされた。普通は三尺型で、白木仕上げである。硬木の箪笥はケヤキ、サクラ、カツラなどを使用したもので、整理箪笥、用箪笥などとして、一般に利用されている。

＜日本民俗文化財事典による＞

箪　笥

寄贈資料

（昭和59年４月１日～昭和60年３月31日）

次の方々より貴重な資料を御寄贈いただきました。ありがとうございました。

区分 番号	寄贈者 住所	寄贈者 氏名	寄贈品 品名	寄贈品 数量	備考
1	中藤５－19－５	内野　定年	長火鉢	１点	
			鉄瓶	１点	
			銅壺	１点	
			手動ミシン	１点	
2	三ツ木1,050－2－2	久保田安五郎	縄撚機	１点	ツルベ井戸用
3	三ツ木540	青山重太郎	ハカリ	２点	
			分銅	18点	
			一升マス	１点	
4	中藤4,195	波多野国光	新聞綴	１冊	昭和16年～昭和18年
5	中央2－27－3	内野　和市	木挽ノコギリ	１点	
			一斗桶	１点	
6	三ツ木1,050－5	石川伊三郎	小学校教科書	20冊	
			スズハク	１点	米軍使用
7	岸682	武蔵村山高校	昆虫標本	426種	
8	中藤3－30－5	内野　元夫	シマダ糸	３束	
9	中藤５－74－１	高橋　義市	唐箕	１点	
			モチコネ機	１点	
			マブシ織機	１点	
10	中藤4,239	川島　政雄	ウシクビ	１点	
			ザグリ	１点	
			糸アゲ車	１点	
			踏鋤	１点	
			千歯抜き	３点	
			茶プルイ	２点	
			ヌキナシ	１点	
			花入カゴ	１点	
			オヒツ	１点	
			木製重り	11点	
			ワラジ編機	１点	
			発動機、他	90点	

資料館利用状況（昭和59年４月１日～昭和60年３月31日）

(1)　利用状況

区分 月別	開館日数	利用者数	市内 人数	市内 割合	市外 人数	市外 割合
	日	人	人	%	人	%
S.59.4	24	1,411	760	53.9	651	46.1
5	24	1,807	889	49.2	918	50.8
6	25	986	585	59.3	401	40.7
7	25	1,291	641	49.7	650	50.3
8	26	2,124	1,402	66.0	722	34.0
9	23	685	394	57.5	291	42.5
10	24	1,391	535	38.5	856	61.5
11	24	1,250	443	35.4	807	64.6
12	23	657	287	43.7	370	56.3
S.60.1	22	587	376	64.1	211	35.9
2	22	1,021	738	72.3	283	27.7
3	25	1,853	1,186	64.0	667	36.0
合計	287	15,063	8,236	54.7	6,827	45.3

(2)　参　考（市外利用者の状況）

区分 月別	市外利用者数	三多摩地区 人数	三多摩地区 割合	23区 人数	23区 割合	都外他 人数	都外他 割合
	人	人	%	人	%	人	%
S.59.4	651	489	75.1	64	9.8	98	15.1
5	918	772	84.1	69	7.5	77	8.4
6	401	225	56.1	98	24.4	78	19.5
7	650	333	51.2	235	36.2	82	12.6
8	722	396	54.8	117	16.2	209	28.9
9	291	173	59.5	66	22.7	52	17.9
10	856	538	62.9	221	25.8	97	11.3
11	807	570	70.6	102	12.6	135	16.7
12	370	180	48.6	149	40.3	41	11.1
S.60.1	211	127	60.2	44	20.9	40	19.0
2	283	176	62.2	41	14.5	66	23.3
3	667	395	59.2	153	22.9	119	17.3
合計	6,827	4,374	64.1	1,359	19.9	1,094	16.0